

「家族に原発で働けと言えますか」

果てない被ばく労働

脱原発デモの現場ではあまり語られないが、避けられないことがある。福島第一原発の廃炉処理や除染作業だ。廃炉までには、膨大な労働力と被ばくが伴う。さらに経験の乏しい除染の被ばく対策も課題に挙がっている。昨年末にできた除染被ばく規制は有効なのか。長期にわたる作業を保障するのは、確かな労働者保護の仕組みだ。だが、現場では鉛板による被ばく隠しすら発覚している。

(出田阿生、中山洋子)

「あなたは、あなたの大切な夫、息子に、原発 故収束作業に従事する。」「町内は原発で働くで働けと言えますか。私 福島県富岡町に家を建 人が多く、息子からも小 はねえべ」と話している。木田節子さん(五〇)。

脱原発デモに、こう記されたブラカードを手にして参加する女性がいる。木田節子さん(五〇)。

特報



脱原発デモの前立つ原発作業員の母、木田節子さん(27日、東京・霞が関)

「あなたは、あなたの大切な夫、息子に、原発 故収束作業に従事する。」「町内は原発で働くで働けと言えますか。私 福島県富岡町に家を建 人が多く、息子からも小 はねえべ」と話している。木田節子さん(五〇)。

事故後の十月月間は引きこもっていた。その間、原発に関する本を数多く読んだ。「勉強が足りなかった。作業員は政治家や電力会社に利用されてきたと気づいた」

長男は十九歳で東京電力の下請け会社に就職した。「四次か五次請け」で、八年勤めて月給は手取りで十七万円程度。ボーナスもなかった。一年半前に、少し条件の良い今の会社に転職した。

今年二月、避難先に寄った長男とテレビを見てみると再稼働のニュースが流れた。「この国は懲りないね。福島がこんなになって責任も取っていないのに」と木田さんがあきれると、長男は「この国には資源がないから原発が必要なんだよ」とボソッとつぶやいた。

「原発が爆発して住む所を追われた。田舎に原発を造り、地元民が被ばくしても仕方がないと電力会社に思われている」とも知らないのか

しかし、この木田さんの言葉は届かなかった。その後、長男は寄り付かなくなってしまった。知人の原発技術者から「東電は社員を被ばくさせたくないので、協力会社(下請け)から出向名目で人を呼ぶ。息子さん

「東電は社員を被ばくさせたくないので、協力会社(下請け)から出向名目で人を呼ぶ。息子さん

事故収束作業 息子の「使命感」、胸痛める母

「必ずれ福島第一の収束作業に従事させられるだろう」と警告された。その予想は現実となった。ただ、他の原発労働者と知り合い、長男の心情を少し理解できた。「みんな被ばくは怖い。『必要とされている』と自己犠牲の精神を奮い立たせ、必死に自分を支えていると思う」

別の原発労働者からはデモに参加した感想を聞かされた。「今すぐ廃炉」という掛け声に違和感を抱いたという。

「廃炉にも四十年以上かかる。都会で原発反対と叫ぶ人たちは、その間も被ばく労働が続くことが分かっているのか」

木田さんは最近、原発労働をめぐる対政府交渉に出た。長男と同年齢の官僚が「雇用保険に入っていない作業員が半分くらいいる」と、淡々と語っていた。同じ国のために働いているのに、この官僚と長男の置かれている環境の違いは何か。憤りを覚えたという。

この国は、私が思っていたような国じゃなかった

(木田さんと原発、そして日本)より